

# 女性作家について書く

—シャーロット・ブロンテとギヤスケルの場合—

小田 夕香理

## 1 はじめに

1857年に発表されたエリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-65) の『シャーロット・ブロンテの生涯』(*The Life of Charlotte Brontë*, 1857)<sup>1</sup> は、ブロンテ文学に親しむための礎として長年にわたって読み継がれてきた。近年では、ジュリエット・バーカー (Juliet Barker) の『ブロンテ家の人々』(*The Brontës*, 1994) 等、より綿密な調査に基づく伝記の登場によって『生涯』の信憑性は失われたが、代わりにその虚構性に関心が集まるようになった。<sup>2</sup> エリザベス・リグビー (Elizabeth Rigby) が『クォーターリー・レビュー』(*Quarterly Review*) で ‘pre-eminently an anti-Christian composition’ (McNeas 3: 51) と評し、以後も反抗的なテーマを批判されることの多かった『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1848) の作者であるシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-1855) は、その作品のイメージゆえに、死後も誹謗中傷の対象となった。『生涯』の成立は、その状況に心を痛めたシャーロットの父が、彼女の作家仲間であったギヤスケルに伝記の執筆を依頼したことに始まる。つまり、シャーロットについての誤解を解く目的で伝記を書くという方向性は、ギヤスケルが依頼を受けた時点ですでに決まっていたのであり、虚構に満ちた伝記が生まれたのは、彼女がその目的を遂行するために小説家としての創作力を発揮したことを意味するのである。

興味深いのは、ギヤスケルの『生涯』の主題となったシャーロット・ブロンテその人も、作家であった二人の妹、エミリ (Emily Brontë, 1818-48) とアン (Anne Brontë, 1820-49) についての伝記的な記述を残していることである。1850年、エミリの『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847) とアンの『アグネス・グレイ』(*Agnes Grey*, 1847) の第二版を出版する際、『ジェイン・エア』に続いて二作目の『シャーリー』(*Shirley*, 1849) を発表し、小説家としての地位を確立していたシャーロットは、二人についての「伝記的紹介文」(‘Biographical Notice of Ellis and Acton

Bell)、『嵐が丘』の「まえがき」(‘Editor’s Preface to the New Edition of *Wuthering Heights*’)と、妹たちの詩を解説した「覚書」(‘Prefatory Note to “Selections from Poems by Ellis Bell”’)を付して、二人の人生と作品について説明した。<sup>3</sup>シャーロットの執筆動機はギヤスケルのそれによく似ている。姉妹がそれぞれの名前の頭文字をとったカラー、エリス、アクトン・ベル (Curren, Ellis, Acton Bell) というペンネームで作品を発表した結果、各作品の作風の類似から、一人の作者が三役を演じているのではないかという声が上がった。加えて、彼女たちの作品の不道徳性を非難する批評も多かった。シャーロットは、三人の作家が実在することを示して世間の誤解を解き、また批判された妹たちを弁護しようという目的で筆を取ったのである。つまり、シャーロットとギヤスケルには、親しい間柄にあった女性作家が世間から受けた誤解を解くために伝記的な記述を行ったという共通点が存在するのである。

リンダ・H・ピーターソン (Linda H. Peterson) やバーカーも指摘しているが、ギヤスケルの『生涯』には、シャーロットが「伝記的紹介文」や「まえがき」で用いた手法を意識し、シャーロットが育った地域の特色、家族の悲劇に焦点を当てて作品の性質を弁護する節が見られる (Peterson 341; Barker xviii)。たとえば、『嵐が丘』の「まえがき」において、シャーロットは、作者が育った環境を ‘moorish, and wild, and knotty as a root of heath’ と説明し、ゆえに彼女の作品に「無骨さ」(‘rusticity’)があるのは当然であると述べ、作品の内容とともに作者の人格についても正当化を試みている。そして、‘Doubtless, had her lot been cast in a town, her writings, if she had written at all, would have possessed another character’ と述べて、エミリの「無骨さ」を作品から切り離そうとする (‘P’ 325)。要するに、責められるべきは荒野を背に人里離れた小村で育ったことであり、エミリ本人には非がないのだとシャーロットは訴えているのである。

『生涯』でシャーロットと彼女の作品『ジェイン・エア』を弁護する際にギヤスケルが用いる手法は、上に示したシャーロットの手法を思わせるものである。ギヤスケルは、『ジェイン・エア』の所々に「粗野さ」(‘coarseness’)が見られることを自ら認めつつも、‘I only ask those who read them to consider her life,—which has been openly laid bare before them,—and to say how it could be otherwise’ (*Life* 426) と述べ、シャーロットの生まれ育った環境においてはそのような作品を生み出し

たことも当然であるとして、作者の置かれた厳しい生活環境を理由に作品への批判を斥けようとする。ギヤスケルもまた、シャーロットと同様、弁護の対象を救うためにその生い立ちを説明することで読者の同情を得ようとするのであり、彼女たち二人が行った伝記的な記述には、執筆動機に加え、その論法にも共通する部分が見られるのである。

本稿では、シャーロットの「伝記的紹介文」と「まえがき」をギヤスケルの『生涯』と比較し、ヴィクトリア朝の二人の女性作家が別の女性作家をどのように弁護したのかを考察するとともに、その過程が彼女たち自身のアイデンティティとどのように関わっているのかを検証したい。

## 2 「作家」を描くシャーロット

まず、「伝記的紹介文」においてシャーロットがどのような手法で彼女の姉妹を描いているのかを見てみよう。シャーロットは、冒頭で、ベルの名前で発表された小説が一人の作家によるものだという世間の誤解を解くために「伝記的紹介文」の執筆を決めたことを明らかにしている（‘BN’ 319）。しかし、読者に事実を知らせ、作品とその作者への理解を求めるといった目的を遂行しつつも、シャーロットは、彼女たち姉妹が目指したものが、才能においても男性に劣ることのない「作家」(author)であったという主張を行わずにはいられなかったようである。

シャーロットが姉妹のことを、性別を問わない「作家」という表現を使って読者に認識させようとする様子は、彼女が注意深く言葉を選び、段階的に目的を遂行しようとする手法からも分かる。シャーロットはエミリを繰り返し「妹」という女性を意味する言葉で呼び、エミリの内向的な性格と閉鎖的な生活環境を説明した上で、彼女の詩を‘not at all like the poetry women generally write’（‘BN’ 319）と称えている。シャーロットは、エミリが「女性」であることを認めながらも、彼女が書いたものは「女性」が書いたとは思えないほどに、つまり男性が書いたものと遜色ないほどに優れたものであったという意味を込めて、エミリから「女性」という枠組みを巧みに取り外すのである。これは、エミリが性別に囚われることなく、才能ある「作家」として評価されるべきであるとシャーロットが考えていたことを示すとともに、彼女自身を含めた三姉妹が皆そのような「作家」として扱われるべきであるというシャーロットの心情を表している。

『シャーリー』が出版された際、G・H・ルイス (George Henry Lewes, 1817-78) はシャーロットから ‘I wish you did not think me a woman’ (Smith 2: 275) と書かれた 1849 年 11 月の手紙を受け取っていたにも関わらず、『エジンバラ・レビュー』(Edinburgh Review) の 1850 年 1 月号において、「女性」の作品であることを前提に『シャーリー』を批評した。傷ついたシャーロットは 1 月 19 日付でルイスに手紙を書き、‘after I had said earnestly that I wished critics would judge me as an author not as a woman, you so roughly—I even thought—so cruelly handled the question of sex’ (Smith 2: 332-33) といっって彼の無情を責めた。‘author’ という言葉にはシャーロット自身の手でアンダーラインが引かれており、彼女が「女性」としてではなく「作家」として評価を受けることをいかに強く望んでいたのかが分かる。ルイスの批評が、「性別の問題」を取り上げずに「作家」の作品として『シャーリー』を批評したものであったならば、批評の内容がいくら厳しいものであったとしてもシャーロットの反応は異なっていたであろう。

ゆえに、「伝記的紹介文」においてシャーロットが用いる「作家」という言葉には、彼女の「作家」としての自負と、「作家」として認められたいという願望が込められていると考えられる。シャーロットは、‘We had very early cherished the dream of one day becoming authors’ (‘BN’ 320) といっって、文学的な創作が心の慰めであった幼少時代を経て、いつしか「作家」になることが姉妹の夢となったことを「伝記的紹介文」のなかで説明しているが、シャーロットがここで ‘author’ という言葉を用いていることも、やはり女性であることに左右されることなく、男性と同じように評価される「作家」になるのが彼女たちの夢であったことを伝えているのである。

しかし、「伝記的紹介文」のなかでシャーロットと妹たちが男性を思わせるペンネームを選んだ理由を説明する部分では、彼女の「作家」という属性へのこだわりは別の形で表されることになる。

Adverse to personal publicity, we veiled our own names under those of Currer, Ellis, and Acton Bell; the ambiguous choice being dictated by a sort of conscientious scruple at assuming Christian names positively masculine, while we did not like to declare ourselves women, because—without at that time suspecting that our mode of

writing and thinking was not what is called ‘feminine’—we had a vague impression that authoresses are liable to be looked on with prejudice; we had noticed how critics sometimes use for their chastisement the weapon of personality, and for their reward, a flattery, which is not true praise. (‘BN’ 320)

シャーロットは、彼女たち姉妹が「明確に男性のものだと分かるクリスチャン・ネーム」ではなく、カラー、エリス、アクトン・ベルという「曖昧な」名前をペンネームに選んだのは、「男性であることを名乗ることへの良心的なためらい」と「自分たちが女性であると宣言したくはなかった」という気持ちの混在が理由であったからだと述べる。そして、当時の彼女たちの「書き方、考え方がいわゆる女性的なものではないのではないかとは思ひもしないで」、「女性作家というものは偏見をもって見られがちだというぼんやりした印象」をもっていただと説明する。文字通り読めば、「女性」であることは隠したいが男性であると明言するのは憚られるという控えめさをもった彼女たちが、それぞれの作品の性質が世間にどう映るかなどとは考えずに無邪気に創作に勤しみ、批評家たちが「女性作家」に対する偏見を持っているという「ぼんやりとした」考えから、男性であるとはっきり主張をすることのないペンネームを選んだという意味に取れる。しかし、ここに隠されているのは、性別に囚われることなく「作家」としての立場を主張したいと思ひながらも、読者の前では「女性的」な無知を装って「女性的」でないという非難の先回りをしようとする、シャーロットの戦略ではなかろうか。先述したように、シャーロットはこの「伝記的紹介文」のなかで、エミリの詩が「一般的に女性が書く詩とはまったく異なって」いたとも述べており、彼女たちの作品が「女性的」ではないとは思ひもしなかったという記述に矛盾しているのである。

また、「女性作家というものは偏見をもって見られがちだというぼんやりとした印象をもっていただ」という部分は、女性がものを書くことをよしとしないヴィクトリア朝の概念ゆえに、謙虚さを盾におそろおそろ行われたシャーロットの自己主張としても捉えることができる。先述の、彼女のルイス宛の書簡の内容が示すように、シャーロットは自分が女性であることを材料に作品を批判されることについて強い反発心をもっていただ。つまり、「女性作家」が受ける不公平な批評には「ぼんやりと」ではなく明確に不満をもっていただのである。しかし、彼女た

ち姉妹の作品が男性の作品と同じように評価されるべきであると声高に訴えることで女性らしさの欠如を指摘されることを憂慮したシャーロットは、「はっきり男性とわかる」名前を用いることにはためらいがあるものの、「女性」の名前で作品を発表することには、「女性作家」への「偏見」についての「ぼんやりとした印象」ゆえに気が進まなかったのだと表現を和らげ、読者に反感をもたれまいとするのである。彼女たちの書き方や考え方が「女性的」であると判断されることには抵抗があり、作品の質も男性作家のものにひけを取らないと信じるシャーロットの自負は、ここでは非難を回避しようとする自己防衛となって表れている。これは、性別に拘わらず一人の「作家」としての価値を主張したいと思いながらも、「女性」がものを書くことに対する世間の反感に正面から立ち向かうことには躊躇を覚えるという、シャーロットの保守的な側面を示しているのである。

### 3 「女性」を描くギヤスケル

ギヤスケルの『生涯』に目を移してみよう。キャロリン・ハイルブラン (Carolyn G. Heilbrun) は、ギヤスケルが行ったのはシャーロットの才能の賛美ではなく、女性作家という常軌を逸した立場から救い出して「女性らしさという安全性」(the safety of womanliness) を与えることであったと指摘している (Heilbrun 22)。ギヤスケルは、1855年5月、ブロンテ氏から『生涯』の執筆依頼を受けるより半月前に、シャーロットの出版社のジョージ・スミス (George Smith) に手紙を書き、彼女の肖像画の入手について協力を頼んでから ‘I will publish what I know of her, and make the world (if I am but strong enough in expression,) honour the woman as much as they have admired the writer’ と続けている (Chapple and Pollard 345)。この手紙は、ブロンテ氏の依頼がなくともギヤスケルがシャーロットについて書くことを心に決めていたという、シャーロットに対する彼女の強い関心を示すとともに、ギヤスケルがこの時点ですでにシャーロットの「女性」としての側面を描くことで「作家」としてシャーロットが世間に与えた印象を変えようとしていたことを示している。事実、『生涯』において、シャーロットが書きものをする場面の前後には、全編にわたり、必ずといってよいほど、彼女が家事の進み具合や家族の健康状態を心配する様子が挿入されている。ギヤスケルは、シャーロットが「作家」としての活動のみに執心したのではなく、「女性」としての義務に忠実であったこと

を読者に示すことで、シャーロットの「女性らしさ」が健全であることを訴えるのである。

しかし、ギヤスケルが『生涯』において最終的に描こうとするのは、シャーロットが「作家」と「女性」の二つの役割の両立を果たしたことへの賞賛ではなく、彼女の完全な「女性らしさ」である。『生涯』の終盤において、ギヤスケルは、シャーロットがドベル氏 (Mr. Dobell) に宛てて書いた手紙 (1854年2月3日付) を引用するにあたり、‘before we lose all thought of the authoress in the timid and conscientious woman about to become a wife, and in the too short, almost perfect, happiness of her nine months of wedded life’ (*Life* 443-44) と述べている。ギヤスケルは、「妻になろうとしている内気で慎重な女性」や「九ヶ月の結婚生活の、短くほとんど完璧な幸せ」のなかに「女性作家」であるシャーロットと彼女の「知的な側面」は消失しようとしているのだと説明しているのであり、シャーロットを独身の「女性作家」という「女性らしさ」を逸脱した存在から「内気で慎重な女性」へ、最終的には「ほとんど完全な幸せ」のなかにある「妻」へと轉身させることで、「反キリスト教的な」作品であるとされた『ジェイン・エア』の作者が完全な「女性らしさ」の内にはしか存在しなくなることを印象づけるのである。この場面に至るまで、ギヤスケルはシャーロットの「作家」としての活動と「女性」としての義務を務める様子を繰り返し併記し、「作家」としての側面をもっている、彼女が「女性らしさ」に欠けるわけではないことを訴えてきた。しかし、ここでは、「作家」としての彼女には「女性作家」という女性性を強調した表現が与えられ、その「女性作家」としての存在も「女性」であり「妻」となるにいたっては必要のないものとされる。「妻」となって「女性らしさ」が完成されれば、もはや「作家」であったシャーロットは存在しなくなるのだとギヤスケルは示唆しているのである。

さらに、ギヤスケルは結婚後のシャーロットについて ‘Henceforward the sacred doors of home are closed upon her married life. We, her loving friends, standing outside, caught occasional glimpses of brightness, and pleasant peaceful murmurs of sound, telling of the gladness within’ (*Life* 450-51) と語り、かつて「粗野」な作品を発表した「作家」シャーロットが、「閉ざされた」家庭のなかで「妻」としての幸せを「ささやく」ことしかしなくなり、もはや世間から非難を受ける対象としては存在していない

ことを念押ししている。シャーロットが「女性」であることに囚われずに「作家」として彼女たち姉妹を読者に認知させようとしたのとは対照的に、ギヤスケルは、「作家」としてではなく「女性」としてのシャーロットを描くことを目的に『生涯』を執筆した。そして、シャーロットの完全な「女性らしさ」さえも読者から遠ざけて、彼女を一切の誹謗中傷が届かない場所へと連れ出すのである。

#### 4 「女性」は「作家」になれるのか

ロバート・サウジー (Robert Southey, 1774-1843) は、1836年12月にシャーロットが自作の詩の批評を求めて書いた手紙に対し、1837年3月12日付の返信で、*‘Literature cannot be the business of a woman’s life: & it ought not to be’* といってシャーロットを諭した (Smith 1: 166-67)。それに対してシャーロットは3月16日付で礼状を送り、サウジーの *‘kind & wise advice’* に感謝の意を述べ、本意ではないにしろ、*‘imagination’* に頼らない生活を送り、文学での成功を夢見ないことを約束している (Smith 1: 168-69)。しかし、興味深いのは、ギヤスケルが『生涯』でこれらの書簡のやり取りを取り上げた後、シャーロットの心境を次のように説明していることである。

This ‘stringent’ letter made her put aside, for a time, all idea of literary enterprise. She bent her whole energy towards the fulfilment of the duties in hand; but her occupation was not sufficient food for her great forces of intellect, and they cried out perpetually, ‘Give, give,’ while the comparatively less breezy air of Dewsbury Moor told upon her health and spirits more and more. (*Life* 127)

シャーロットがサウジーの「厳しい」手紙を受け、「文学上の企てを考えることを全てやめ」、「目の前の務めを行なうことに全精力を注ぎ込む」と改心を誓う様子は、本来ならばギヤスケルが証明しようとするシャーロットの「女性らしさ」を読者に訴えるものである。しかし、ギヤスケルはここでシャーロットのもつ「知性の偉大なる力」に「与えてくれ、与えてくれ」と叫ばせている。ギヤスケルは、「女性らしさ」とは程遠い、「知性」の抑制を強いられて苦しむ「作家」の姿を描いているのである。シャーロットの書簡における「想像力」は、ここでは「知性」

に相当する。シャーロットが、「伝記的紹介文」において、世間に広まった彼女たち姉妹の「無骨」なイメージを払拭しようとしながらも、結局は「作家」という存在に対する彼女自身の思いを多く語ってしまったのと同様、ギヤスケルもまたシャーロットの「女性らしさ」を前面に押し出そうとしながら、「女性」であるという理由で「知性」を取り上げられてしまうことに関しては、自らが感じた反発を語らずにはいられなかったのである。

別の箇所においても、ギヤスケルはシャーロットの創作を弁護するような姿勢を見せる。ギヤスケルは、シャーロットと妹たちが実生活における過酷で悲惨な経験を感情のままに書いた点においては分別の欠如を指摘するが、‘all I say is, that never, I believe, did women, possessed of such wonderful gifts, exercise them with a fuller feeling of responsibility for their use. As to mistakes, they stand now—as authors as well as women—before the judgment-seat of God’ (*Life* 272) と続ける。シャーロットが「女性」として、そして「作家」として、世間に非難されるような内容の作品を残したことについては「神の裁き」を受けなければならないとギヤスケルは語るが、姉妹が神から与えられた「素晴らしい才能」を生かしたことを追及しようとはしない。シャーロットを「女性」として弁護するにあたっては必ずしも有益ではないにも拘わらず、ギヤスケルは彼女の「才能」に価値があることを訴えずにはいられないのである。

この部分は、シャーロットが書いた『嵐が丘』の「まえがき」から影響を受けた可能性も高い。シャーロットは、エミリがヒースクリフ (Heathcliff) という非人間的な人物を生み出したことが正しいかどうかは分からないとしながらも、『嵐が丘』を生み出した、時に作家が制御できなくなるほどにたくましい「創造力」(‘creative gift’) は称えるべきであるという理論を展開している (‘P’ 327)。シャーロットはエミリの「創造力」が作者の制御の域を超えたものであるとって『嵐が丘』の不道徳性についてはエミリに責任がないことを示すためにこの理論を用いているが、「才能」が神によって与えられたものであり、それを生かすことに罪はないというギヤスケルの主張もまた、シャーロットの「才能」を『ジェイン・エア』の「粗野さ」から守る作業に他ならない。ギヤスケルは、シャーロットの「女性らしさ」を完全なものにすることを『生涯』執筆の目標に据えており、「女性」が男性同様に「作家」として活動することを望む彼女を擁護しようとはしな

い。しかし、エミリという「女性」がもつ「作家」としての「想像力」や「才能」について語られるこの部分については、ギヤスケルも賛同を覚えたのではなからうか。

肖像画家の道を歩む友人イライザ・フォックス (Eliza Fox) に宛てた 1850 年 2 月の手紙で、ギヤスケルは、「女性」が家庭の義務より「芸術家」(‘artist’)としての人生を優先することについて強い反感を示しながらも、二つの役割をこなすことが相乗効果となって健全さを得られる利益があると記している (Chapple and Pollard 106)。「女性」が「作家」になれるのかという問題は、シャーロットだけでなく、小説家として活動するギヤスケル自身の関心事でもあった。ギヤスケルは、この手紙を書いた後でさらに思慮を重ね、二日後に同じ手紙に文章を書き足し、個人の欲望を満たすためでなく、心の慰めを求めて、あるいは神が与えた仕事として書くのであれば、「女性」が「作家」として活動することにも意味があると述べている (Chapple and Pollard 107)。ギヤスケルは、自己実現という個人的な目的からでなく、神に与えられた「才能」を生かして社会に貢献するという動機があるという点で、「女性」である自分が作品を発表することを正当化していた。この考え方は、『生涯』において、「粗野」な作品を残した「作家」カラー・ベルに「女性らしさ」を与えようと躍起になる一方で、神が彼女に与えた「才能」は称えるべきであると訴えるという一見矛盾した彼女の訴えを説明している。

シャーロットは「まえがき」において、最終的にはエミリを「瞑想のヴィジョン」(‘the vision of his meditations’)をもった「彫刻家」(‘statuary’)と表現し、性別を超えた「芸術家」という称号を与えている (‘P’ 328)。シャーロットが求めたのは、「作家」という名の「芸術家」として、「女性」であることに囚われることなく「想像力」を自由に行使することであった。「女性」が「才能」をもって作品を生み出すことができるか否かというところでは、シャーロットとギヤスケルの二人の女性作家の見解は一致をみるが、シャーロットが「作家」として認められることを欲する生き方しか出来なかったように、ギヤスケルも「女性らしさ」が許す範囲で与えられた「才能」を生かすというやり方でしか「作家」としての自分を認めることが出来なかった。小説を発表するという「女性らしさ」の逸脱を意味する行為は、「女性」としての健全さを維持することによって、かろうじてギヤスケルの理性の内側に留まっていたのである。シャーロットの「女性らしさ」を

示すために繰り返し用いた、「作家」としての側面と「女性」としての義務をこなす様子を併記する手法は、ギヤスケル自身の精神状態の反映でもあるのだろう。

## 5 最後に

フェリシア・ボナパルト (Felicia Bonaparte) も指摘するように、ギヤスケルは『生涯』でシャーロットの人生と向き合いながらも、ついに「女性」が「芸術家」となる資格があると納得することはなかった (Bonaparte 250)。しかし、『生涯』を締めくくるにあたり、ギヤスケルはシャーロットの「非凡な天才」(‘extraordinary genius’) と「高潔な美德」(‘noble virtue’) を称え、「より多くの厳粛な大衆」(‘larger and more solemn public’) に対してシャーロットへの尊敬を求めている (*Life* 457)。「妻」となって家庭の幸せを「ささやく」のみになり、完全な「女性らしさ」のなかで死んだはずのシャーロットに、ギヤスケルは、「高潔な美德」という「女性らしさ」と併記しているとはいえ、「非凡な天才」の持ち主である「作家」としての側面を回復させているのである。ギヤスケルが「高潔な美德」という「女性らしさ」の称揚と併せてシャーロットの「才能」に最後にもう一度「非凡な天才」として賛美を与えているのは、ギヤスケルが「女性」としての良心に許されうる限りの「作家」シャーロットへの賛辞を送ったことを意味するのではなかろうか。家庭という、「女性」にとって理想とされる安住の場所をシャーロットに与えながらも、ギヤスケルは、彼女を完全には消し去ることができずに結局は作品に連れ戻している。シャーロットの、性別に関係なく「作家」として認められたいという強い思いは、ギヤスケルの考え方を変化させるには至らなくとも、完全な否定を免れるのに十分なだけの影響力をもってギヤスケルに作用し、作品のなかに留まっているのである。

作者の生活環境からその作品を弁護するという同じ手法をもって展開される、シャーロットとギヤスケルの二人の女性作家による女性作家についての伝記的な記述は、「作家」を描くのか、「女性」を描くのかというところで、大きな分岐点を迎える。シャーロットとギヤスケルは、ともにヴィクトリア朝の「女性」としての美德を内面化させた女性であった。その内面化は同一なものではなく、二人が考える「女性らしさ」には差異があるが、彼女たちが「作家」と「女性」という二つの側面をもつことについての苦悩を共有していたことに間違いはない。

シャーロットとギヤスケルの伝記的な記述に描かれているのは、女性作家であった彼女たち二人の葛藤の来歴なのである。

### 注

本稿は、日本ギヤスケル協会第23回大会（2011年10月2日、於江戸川大学）において発表した内容に全面的に加筆・修正を施したものである。

この研究は、平成23年度福井工業大学特別研究費の支援を受けた。記して謝意を表す。

- 1 この作品の日本語訳については、山脇百合子訳『シャーロット・ブロンテの生涯』を参考にした。作品名は、以下『生涯』と略す。
- 2 長瀬久子氏は、『生涯』は伝記ではなく、ギヤスケルが「創作」行為の積み重ねの上に書いたシャーロットをヒロインとする小説のような性質をもつと論じている。(146)
- 3 以下、「伝記的紹介文」、「まえがき」からの引用については、Oxford版 *Wuthering Heights* に収録されたものを用い、略称（それぞれ‘BN’、‘P’）と共に括弧内にページ数を示す。日本語訳については、中岡洋、芦澤久江訳『嵐が丘』を参考にした。

### 引用文献

Alexander, Christine and Margaret Smith, eds. *The Oxford Companion to the Brontës*. Oxford: Oxford UP, 2003.

Barker, Juliet. *The Brontës*. 1994; rpt. London: Phoenix, 1999.

Brontë, Emily, *Wuthering Heights*. Ed. Patsy Stoneman. Oxford: Oxford UP, 2008.

Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. Charlottesville: UP of Virginia, 1992.

Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. Ed. Angus Easson. Oxford: Oxford UP, 2001.

Heilbrun, Carolyn G. *Writing a Woman's Life*. New York: Ballantine, 1988.

McNees, Eleanor, ed. *The Brontë Sisters: Critical Assessments*. 3 vols. Mountfield: Helm

Information, 1996.

Peterson, Linda H. “Review of Brontë Studies: The Millennial Decade, 1999-2000.”

*Dickens Studies Annual* 31 (2002), 337-64.

Smith, Margaret. ed. *The Letters of Charlotte Brontë*. 3 vols. Oxford: Oxford UP, 1995-2004.

中岡洋・芦澤久江(訳)『嵐が丘』みすず書房, 1996.

長瀬久子『エリザベス・ギヤスケルとシャーロット・ブロンテ—その交友の軌跡と成果—』東京, 英宝社, 2011.

山脇百合子(訳)『シャーロット・ブロンテの生涯』大阪教育図書, 2005.

(福井工業大学専任講師)

## Abstract

# Writing about Women Writers: Charlotte Brontë and Elizabeth Gaskell

---

Yukari ODA

---

In writing *The Life of Charlotte Brontë*, Elizabeth Gaskell intended her biography to rescue Charlotte Brontë from criticisms of both her works and her personality. What is intriguing is that Charlotte herself also wrote biographical notes, published in the second edition of Emily's *Wuthering Heights*, to clarify her sisters' lives and to justify the alleged rusticity of their writings. Charlotte, however, in spite of her original intention in 'Editor's Preface to the New Edition of *Wuthering Heights*', placed special emphasis on her sisters' ability to write novels which were at least the equal of anything produced by male authors. Charlotte wished to be evaluated at a comparable level to male authors, and she projected this wish onto her sisters when she wrote about them.

By contrast, Gaskell's biographical aim was to emphasise Charlotte's womanliness. Gaskell did not approve of Charlotte's wish for the status of a male-equivalent 'author', but instead believed that women should use their creative gifts differently, in a feminine way. Gaskell placed a female writer's duties as a woman ahead of her duties as a writer, believing that this represented the only way for a female writer to continue writing without losing her conscience as a woman. Accordingly, Gaskell, in *Life*, describes Charlotte in terms informed by this belief.

Charlotte describes her sisters and herself as 'authors' whereas Gaskell aims to restore Charlotte to womanliness. It is nevertheless certain that both Gaskell and Charlotte Brontë internalized the perceived Victorian virtue of womanhood, and that they were both passionately committed to the struggle to write. Though they had different views on women writers, what they produced in their biographical writings were the histories of their conflicts as women writers in the Victorian period.